

## モンゴルで見つけた大切なこと

上野 一成

(聖徳学園小学校2年)

青い空と緑の草原。その境目に見える地平線は、ほくのまわりをぐるりと一周、とぎれることなくつながっています。聞こえるのは、風の音と羊たちの鳴き声。こんなに広い空をほくは見たことがありませんでした。どこまでもどこまでも続く草原。その草原の中に、「ほく」が一人、立っている。ほくは広い地球の上に立っている。

### 1. あこがれのモンゴル

「やったー! やっと着いた!」

ほくはうれしくて、飛行機から降りるのを待ちきれず、座席から立ち上がって通路でかけあししたい気分でした。時計を見たり、窓からの景色を見たりを何度もくりかえした5時間半、ほくはついに大好きなモンゴルに着いたのです。

ほくは、幼稚園の年中のときに、おじいちゃんの友達のモンゴル出身力士、朝赤龍関の案内で、初めてモンゴルを旅行しました。そのときにナーダム(モンゴルの大きなお祭り)でモンゴル相撲を見て相撲に興味を持ったほくは、日本に帰ってから相撲クラブにも入りました。モンゴル出身の強い力士がいること、広い草原に動物がいっぱいいて感動したこと、モンゴル料理がおいしかったこと、いろいろなことがきっかけで、ほくはこの国が大好きになりました。日本に帰ってきてから、モンゴルのゲル(遊牧民の人たちの移動式住居)にあこがれて、家の庭にテントを立てて一晩寝てみたり、モンゴル料理をお母さんと作ったりしてモンゴル気分を味わっていましたが、(絶対にもう一度モンゴルに行く!)とずっと心の中で決めていました。

お父さんとお母さんを説得して、2年生の夏、ほくはとうとう2回目のモンゴル旅行に行けることになりました。1回目の旅行では、たくさんの方が訪れるような観光地に行きましたが、今回は、観光客ではなくて、モンゴルの人みたいに自分で実際の暮らしを体験してみたいと思いました。なので、ほくはお母さんたちに何度も頼んでゲルに泊まる予定にしてもらいました。

そんなことを思い出しながら、5時間半ずっとずっと待って、やっとモンゴルの首都・ウランバートルにあるチングス・ハン国際空港に降りたとき、ほくは、3年ぶりに大好きなモンゴルを訪れたというなつかしさと、これから、まだ体験したことのないモンゴルを

見られるうれしさで、ワクワクがとまりませんでした。

(これから1週間、どんなモンゴル旅行になるのかな。)といろんなことが頭の中をぐるぐるまわりました。大自然の中で流れ星をたくさん見たい、遊牧民の人たちと同じものを食べてみたい、草原で馬に乗って走ろう、けい帯電話やテレビがない自然の生活をしてみよう、できるだけモンゴル人らしくなろう、とぼくの夢はどんどんふくらんでいきました。

## 2. 見たことのない大自然

モンゴルに着いた翌日、ぼくたちは、空港のあるウランバートルからカラコルムに向かいました。カラコルムは、昔、モンゴル帝国の首都だったところで、ウランバートルから230キロメートルぐらい車で走ったところにあります。230キロメートルというと、日本で高速道路を運転していくと、数時間で着いてしまいがちですが、モンゴルではそう簡単ではありませんでした。

ウランバートルでは、出発の前にスーパーマーケットで、ペットボトルの水を6ダース(72本)も買いました。現地を案内してくれるアマルトブシンさん(アマルさん)は、体重100キロを超える大きな体で、その水をかると車に積み込んでいきます。こんなに大量の水を買ったことはなかったので、

「これは多すぎないですか？」

と聞いたら、アマルさんは

「草原では水が手に入らないので、これでも少ないくらいですよ。」

と言うのです。ぼくはびっくりして、この先の旅がどうなるのか、ちょっと不安になりました。

ウランバートルを出ると、あっという間にまわりは家一つない草原になりました。走っても走っても、右も左も草原ばかり。(これがモンゴルだ!)。日本で車に乗って見えるのとは全然違う風景に、ぼくはすごく興奮してきました。

お昼ごはんは、道路の道ばたにある食堂のようなところで食べました。日本の食堂に比べると、古かったり汚れていたりするけれど、骨付きの羊肉やツォイバン(焼きうどんみたいな料理)、ポーズ(羊の肉が入った小ろん包のような料理)は、ぼくがずっと食べたかったモンゴルのおいしい味でした。ぼくは羊の肉が好きなので、お母さんよりもたくさん食べました。

ところが、食後に困ったことが起きました。お店にはトイレがないのです。それらしいものは、屋根がこわれかけたボロボロの木の小屋だけでした。近づいていったら、小屋の中には穴が掘ってあり、その両脇に木の板があるだけです。もちろん水洗ではありません。くさくてくさくて鼻のおくがつーんとなり、たくさんのハエが飛び回っています。ぼくは

その強れつさに、こわくなってしまい、(これは無理!)と思いました。

アマルさんにどうしてもトイレに行きたいと伝えると、実はモンゴルの草原は「どこでもトイレ」なんだそうです。ここでは、ちょっと人や車から離れたところに行ってもいいのです。日本でそんなことをしたら大変ですが、モンゴルでは大人も子供も、女の人もそうします。広い草原でポツンと一人である人がいたら、だいたいトイレ中なんだとわかりました。

また走り始めると、今度は、ほそうされた道路が突然なくなりました。道はガタガタなので、スピードを落として、それでもたくさんの土けむりをあげながら、大草原の中の道のようなところを車は走り続けました。スピードを上げると、ガタガタが激しくなって車の天井に頭をぶつけそうになります。それは遊園地の乗り物よりも勢いがある、ほくはものすごい冒険をしているような気分でした。アマルさんが気をつかって、なるべく平らな道を選びながら走ってくれましたが、実はほくは、心の中で(もっとスピード出して!もっとガタガタして!)とっていました。

窓から見えるのは草原と羊や馬の大群。人が乗っていない、馬だけの群れが草原を走っています。「かっこいいなあ!」。時どき、車の前を動物たちが横切るので、車を止めて先に行ってもらいます。クラクションを鳴らしても、動物が止まっているときは、動くまで待ちます。車のフロントガラスや、横の窓からすぐのところで見える動物はサファリパークのようで大迫力です!何度見てもうれしくて写真を撮りたくなります。草原がどこまでも続いていて本当に広いので、青い空に浮かんだ雲の影が緑色の草原にクッキリと映ってびっくりしました。地面に映ったこんなに大きな雲の影をほくは初めて見ました。空も雲も草原も、ここでは全部が大きくて近く感じます。(これが地球なんだ。)と思いました。

でこぼこ道を走り続けて7時間、ほくたちはやっとカラコルムに到着しました。ここは、チンギス・ハンのモンゴル帝国時代に首都だった場所です。世界最大の国の一番の都だったのが、今では大草原の中にポツンとある小さな村です。

モンゴルは日本よりも北にあるので、夏は昼間の時間がとても長くなります。カラコルムに着いて、初めてあこがれのゲルに泊まる夜、ほくは星空を眺めるのが楽しみで仕方ありませんでした。夜10時を過ぎても空が暗くならないので、ウランバートルでは、(遅くまで遊べる!やったー!)としましたが、カラコルムでは、(早く暗くなって星が見えないかなあ。)と空の色が変わるのが待ちきれませんでした。ゲルの中で少し待ってから外に出ると、ほくとお母さんは同時に、  
「わあ!すごい!」

と言って星空にくぎづけになってしまいました。空は、大きいや小さいの、白っぽいや赤っぽい、ピカピカ強く光るのやユラユラ静かに光るの、いろんな星でいっぱいになっ

ていました。東京ではなかなか見られない天の川も、はっきり見えました。(星ってこんなにあるんだ…)。ふだん何が起きててもあまり表情が変わらないおじいちゃんも、

「ああ、これはきれいだ!本当によく見えるんだねえ。」

とおどろいています。お父さんは、

「あれが北斗七星で、その先を伸ばしたところにある明るい星が北きょく星だよ。」

と説明してくれました。カラコルムは、都会のような光が全然なくて、高い建物もないので、星以外は本当に真っ暗です。そのとき、ぼくは、シューッと動くものを見つけました。

「流れ星だ!」

「お母さんも見えたよ!」

「え、どこどこ?」

「あっちにシューッと見えた。」

「お願い事した?」

「そんなひまないよ。」

「次はお願いしてみよう。」

ぼくたちは、夜遅い時間なのも忘れて、草原にあおむけになって星を見続けました。

ずーっと星空を見ていたら、広い宇宙の中に吸い込まれそうな感じがしてちょっとこわくなりました。それから、いま見えているこの星は、何十年、何百年も前の星の姿なんだなあと、想像できないくらいの宇宙の広さや時間の長さにくらくらしてきました。

星空の下ではいろんなことが頭の中に浮かびました。(これだけの数えきれない星がある中で、何でぼくはこの時代のこの地球に生まれたんだろう?)、(こんなに星があるなら、やっぱり地球以外にも生き物はいるんじゃないか、だって地球だけなんて不思議過ぎるもん。)、(もしかしたら地球よりもっと進んだ星があって、地球人が他の星に行くより先に宇宙人が地球に来て…、ああ、言葉が通じなかったらどうしよう?)、(来るとしたらいつ来るんだろう?ぼくが生きているうちに?それともずっとずっと未来?)、(太陽はいつかなくなるけど、そのとき、人間はどうするんだろう?ぼくが生きているうちは大丈夫だけど、何十億年か先に必ず太陽はなくなるから、それまでに人間は何かする方法を考える?)。ぼくは頭が混乱しました。その夜、ぼくは夜中の1時半まで起きていました。

### 3. 遊牧民の人たちに会う

その次の日、ゲルの屋根に鳥がバタバタととまった音で目が覚めました。風の音や、鳥の鳴き声など、自然の音がたくさん聞こえて良い気分です。ゲルの中にも、自然の中で寝た感じがしました。昨日の夜、遅くまで起きていたのがうそみたいに、ぼくはパワー全開です。

朝ご飯を食べて車で出発すると、アマルさんが、  
「あそこのゲルに行ってみましょう。」

と、遠くに見える遊牧民のゲルを指さしました。ほくは、(予約もしないで大丈夫なのかな?)と、心配になりました。ゲルの前で車を止めると、アマルさんがその家の人と何か話してから、(大丈夫だそうです。)と合図しました。遊牧民のゲルは遠くから見ると緑の草原に白が目立ってきれいだけど、目の前で見ると、骨組みをおおっている白い布はけっこう汚れていて、やぶけている部分もあります。その布をひもでぐるっと一周巻いてとめてあり、ひもと布の間にはタオルとかがはさんで干してあって、便利だと思いました。ほくは、どきどきしながらゲルに入りました。中には、遊牧民のおばさんとお兄さん、小さい子供が4人いました。その人たちは、顔は少し日本人ほくて、すごく日焼けしています。おばさんは、日本人と違い、おけしょうを全然していません。お兄さんと子供たちはニコッとしなくて、ほくたちをじーっと見ました。(おこっているのかな。やっぱり急に訪問したからかな。)と不安になりましたが、おばさんは無表情のまま、ほくたちにスーティーツァイ(乳茶)とアーロール(ゲルの屋根の上で乾そうしたチーズ)を出してくれました。

アマルさんは、スーティーツァイを飲んで「ふーっ。」とにっこりしました。うすい塩味のミルクティーは、ほくには変な感じだったけれど、モンゴルの人にはほっとする味のようでした。アーロールは堅くてとても酸っぱい石みみたいな感じでした。親切に出してもらったので、ほんの少し食べてみましたが、おかわりしたいとは思いませんでした。お父さんたちはおいしいと言って何個も食べていたから、大人の味なのかなと思ったけど、ゲルの中にいた遊牧民の子供はおやつみたいにつまんでかじっていました。ほくもモンゴルに生まれていたら、毎日アーロールをおいしく食べていたかもしれません。

ほくがこのゲルに入って一番おどろいたのは、床にあるものを見たときでした。なんと、床にはまだ血がついていて生きているような羊の肉が並べてあったのです。ほくは今までこんなものは見たことがなかったので、びっくりしてあとずさりしました。ゲルでは、家ちくを男の家族だけでさばき、それを新鮮なうちに料理するそうです。遊牧民の人たちが動物を解体することは聞いていましたが、本当にそれを見るときには思っていませんでした。

真っ赤な肉や、白っぽいぷるぷるしたものがおいてあるその真横では、小さい子供たちが座ってふつうに遊んでいます。見たくないけれどすごく気になるので、そーっと見たら、肉と一緒に茶色っぽい毛がついた足も4本おいてあって、ビクッとしました。

内臓は悪くなりやすいのですぐに料理するらしく、遊牧民のおばさんが、ゆでたての羊の内臓を持ってきました。最初、おこっているのかなと思ったおばさんは、バケツみたいな大きい入れ物に入った、いろいろな形の、まだあたたかい内臓を親切にナイフで小さく切って渡してくれました。モンゴル人は気持ちをあまり表情に出さないけれど、実はと

でも優しいそうです。おばさんが、おこっているわけではなく、かんげいしてくれているようなのでほっとしました。ほくはこれまで内臓はレバーぐらいしか食べたことがありません。どこの部分だかよくわからないものを「どうぞ。」と言われて、(本当にこれを食べるのかな?) と思いましたが、せっかくくれたので悪いと思って、勇気を出してかじってみたら、それを見たおばさんが、喜んでいと思ってどンドンくれるので困ってしまいました。ほくは、ふだんトリのからあげや豚のシウガ焼きが好きでよく食べていたけれど、生きていた動物がおいしい料理になるまでの間のことは一度も考えたことがなかったな、とそのとき思いました。

遊牧民の人たちは、ほとんど肉中心の食事です。野菜を食べなくていいのかなと思いましたが、内臓には、肉の部分だけでは取れないビタミンなどの栄養があるので、残さず食べると栄養がかたよらないそうです。血も腸につめて、ゆでてソーセージみたいにしててきも残さず食べます。

ゲルの入口の近くには、何かが入ったカンがおいてありました。のぞいてみたら、中に入っていたのは家ちくのファンでした。ファンは、燃料として使うために、大切に集めるそうです。ほくは、動物のファンはばい菌がいっぱいでくさくて汚いと思っていましたが、乾そうすると全くにおいはありませんでした。モンゴルの人みたいに手で持ってみても、全然汚い感じはしません。モンゴルでは蚊取り線香として使うこともあるそうです。馬や羊は草を食べているので、それがそのままファンとなって出てきていて、燃やすといいにおいがしました。肉、乳などの食べられるところからファンまで、遊牧民の人たちは、むだなく全部使っていてすごいです。日本で、お母さんは肉や魚の骨でだしをとったり、野菜の皮を料理に使ったりしますが、遊牧民の人たちにはかなわないなと思いました。

ゲルの外では、車輪が1個外れた三輪車で小さな子供が遊んでいました。綿の飛び出たぬいぐるみも大切に使っていました。そういえば、ゲルの中には、子供のおもちゃはほんの少ししかありませんでした。引っこしが多し、1部屋しかないからだと思います。子供は、馬に乗ったり、草原を走り回ったり、外で遊ぶことが多いのかもしれませんが。ゲルが家というよりも、草原全体が家で、自然の中に住んでいる感じがしました。

#### 4. 日本語を勉強する生徒さんたち

旅行の最終日、ほくは、ウランバートルにある日本語学校に行きました。モンゴルは、日本を好きな人がとても多い国なので、人口当たりの日本語を勉強している人の数は世界で一番多いそうです。

20人ぐらいの生徒さんたちがいる教室に案内され、ほくは日本語で自己紹介をしたり、質問をしたりしました。最初、生徒さんたちは突然現れた日本人の子供に(何だろう?)と

いう感じで注目し、教室はしーんとなって、ぼくはきんちょうしてしまい、小さい声しかでませんでした。でも、ぼくは相撲が大好きなので、モンゴル人力士たちの本名や出身地を言ったら、みんなとても喜んでくれました。急に生徒さんたちと仲良くなった気がしました。

日本語の先生の話でびっくりしたのは、毎日の授業は2時間から4時間で、1学期間勉強するとだいたいの会話ができるようになり、漢字も日本の小学3年生と同じくらい書けるようになるということです。みんな、日本に留学して勉強したい、そして自分たちの国を良くしていきたいという思いが強いので、がんばって勉強してどんどん日本語ができるようになるそうです。

## 5. ぼくがモンゴルで気づいたこと

8月の暑い日に、ぼくは1週間のモンゴル旅行から帰ってきました。

ぼくの大好きなモンゴルは、前回行ったときに比べて、ウランバートルはマンションや高い建物が増えて、都会っぽくなっているような気がしました。でも、モンゴルはまだまだ成長中の国なので、日本がいろいろなところで協力できるんじゃないかと思います。

逆に、ぼくたち日本人がモンゴルから学べることもたくさんあります。

モンゴルの遊牧民は、自然の中で暮らしています。動物を殺して肉を食べたりしますが、そのときには毛皮や骨までむだなく使います。一てきの血も残さないし、フンもむだにしません。これも自然を大切にする一つのやり方なんだと思いました。

ふだんの生活では、モンゴルの遊牧民は自然や生き物の命を大切にしています。日本にいと、動物は人間が飼って世話をするもので、人間が主人で動物はペットです。あきると捨てる人もいます。でも、モンゴルでは違いました。動物はいっしょに生きるもので、人間が助けてもらうこともとても多いのです。大自然の中で道に迷ったとき、ラクダについていけば水がある場所を教えてくれるそうです。ただ動物を大事にするだけではなく、自然をそんけいし、仲良くしていくという考えは、日本にはないような気がしました。前に、ぼくが大事に育てていたトマトとナスとキュウリがヒョウのひ害で全部だめになってしまったことがありました。そのとき、ぼくはすごくがっかりして、お天気が嫌いになったけれど、遊牧民の人たちは自然の中で自分たちの方が季節とかお天気に合わせてうまく生活していました。

また、モンゴルの人たちは国を良くするためにとても努力しています。みんなが、がんばれば成功できるという考えと、とても強い心を持っています。日本語学校で会った人たちは、ものすごい速さで日本語ができるようになっていました。日本でモンゴル出身の力士が活やくできるのも、こういう考え方や気持ちの強さがあるからだと思います。

今年はリオデジャネイロでオリンピックが開かれましたが、2020年には東京オリンピックがあります。はじめての東京オリンピックはぼくが生まれるずっと昔で、ぼくは50年も前の日本を全く知りません。もしかしたら、その頃の日本人は今のモンゴルの人たちみたいに、大きい国に追いつこうと一生けん命がんばっていたのかなと思います。ぼくは今回モンゴルに行って、日本人がなくなってしまった大切なものを発見できたように感じました。

モンゴルは、日本を「第3の隣国」と言うほど、日本のことを良く思ってくれています。だから、日本人もモンゴルのことをもっと知って、仲良くしていけたらいいと思います。

## 6. これからぼくができること

ぼくは、モンゴルでどこまでも続く広い草原や、今まで見たことのない星空、人間より多い家ちくの大群、そんな大自然からパワーをもらった気がしました。旅行中に会った人たちは、顔はニコニコしている人ばかりではなかったけれど、行動は優しく親切でした。小さな子供が馬に乗って家ちくの世話をしている、すごいと思ったし、大人はとても体ががっしりしていて力持ちで、あんなふうになりたいと思いました。

ぼくは、信じられないような特別な経験をたくさんしたモンゴルから日本に帰ってきて、学校に行って勉強をしたり習い事に行ったりするふつうの生活にもどります。場所は違うけれども、3,000キロ離れたモンゴルでもらったパワーと強い気持ちでがんばりたいです。そして、これからもモンゴル人力士を応援しながら、歴史を勉強したり、ニュースを見たりして、モンゴルのことを知り、日本とモンゴルがもっともっと仲良くできるように、ぼくだからできることを探していきたいと思います。

2017年には新ウランバートル国際空港ができるそうです。次に行ったらモンゴルがどんなふうになっているかと想像するとわくわくします。ぼくもあと何才か大きくなったら、考え方や感じ方が変わってくるかもしれません。ぼくはまたきっと、いろいろなことを教えてくれる国・モンゴルに行って新しい何かを発見していきたいです。

バイラルラー（ありがとう）、モンゴル。

絶対にまた来るよ！

(この文章は、当協会会員であり、日本モンゴル友好議員連盟のメンバーでもあった前衆議院議員・上野宏史氏のお子さん・上野一成くんが、昨年9月に読売新聞社主催「第66回全国小・中学校作文コンクール」に提出し、東京都審査において読売新聞社賞を受賞した作品です。読売新聞東京本社の許可を得て掲載しました。)